



2014年度
障害者の芸術活動支援モデル事業
報告書
滋賀

2014年度
障害者の芸術活動支援モデル事業
報告書

滋賀

制作・発行

社会福祉法人グロー（GLOW）～生きることが光になる～ 〒521-1311 滋賀県近江八幡市安土町下豊浦4837番地2

2014年度
障害者の芸術活動支援モデル事業
報告書

滋賀

目次

はじめに	03
障害者の芸術活動支援モデル事業概要	04
相談支援	
相談件数／相談内容	06
具体的な相談例	08
人材育成	
造形活動体験&意見交換会／アンケート	10
障害のある作者の権利を考える研修会／アンケート	12
参加型展示会	
第11回 施設合同企画展「ing… 障害のある人の進行形」	14
実行委員会／アンケート	16
関係者のネットワークづくり	
創作のはじまりを語り合うギャラリートーク	18
調査、発掘・評価、発信	
評価委員／調査・発掘／評価	20
発信	22
モデル事業連携	
事業の概要／各実施団体紹介	24
実践発表会／発信・記録	26
まとめ	28
シガカラー Shiga Color 出展作家紹介	29

はじめに

滋賀県では、戦後間もなく全国に先駆けて陶芸を中心とした障害児・者の造形活動が近江学園において始められました。その取り組みは県内各地に広がり、今もお脈々と受け継がれています。これらの取り組みを礎として、2004年に私たちは、ボーダレス・アートミュージアムNO-MAを開設し、障害者の芸術活動の推進に取り組んできました。NO-MAでは、これまでに54本の自主企画展を開催するほか、国内外の美術館や機関と連携して、彼らの作品の持つ魅力を発信してきました。

なかでもフランスのパリ市立アル・サン・ピエール美術館で開催された「アール・ブリュット・ジャポネ」展（出展者数63人〔20都道府県〕、出展作品数約800点）では、入館者数が12万人を超えるなど好評を博し、日本の公立美術館7館にも巡回しました。

この展覧会を契機の一つとして、障害のある人たちの作品出展の機会や作品をポストカード等の商品にする二次利用の申し入れが増えてきました。同時に、そのような申し入れを受けた障害のある人の家族や福祉事業所が対応に戸惑うケースも出てきました。そのため2011年6月、滋賀県が「障害のある作家の権利保護のあり方研究会」を設置し、障害のある作者の権利の現状の把握と課題の整理や、福祉事業所で造形活動を行う際の指針について検討されました。この検討を踏まえ、翌年3月に「障害福祉サービス事業所の造形活動における作品の著作権等保護のための指針～著作権等保護ガイドライン～」が策定されました。また、同年6月、作者の権利保護や造形活動に関する様々な相談に応じる障害者造形活動支援センター（事業所名：アール・ブリュット インフォメーション&サポートセンター〔略称：アイサ〕）が開設されました。

そして今年、全国5カ所で障害者の芸術活動支援モデル事業がスタートしました。この事業は、障害のある人やその家族、障害のある人の造形活動を支援する人たちを支える取り組みをモデル的に実施し、そのノウハウを全国に普及していくことを目的としています。障害者の芸術活動に関する様々な相談を受ける障害者芸術活動支援センターの設置をはじめ、著作権保護や芸術活動支援に関する研修、作品調査・評価による展示、また自治体や各種関係機関とのネットワークづくりなど、多様な取り組みが始まりました。

また、社会福祉法人グローでは、これらの取り組みに加え、全国5カ所の実施団体間の連絡調整や情報共有・意見交換を行う連絡会議の企画、事業全体の成果の取りまとめを行う「モデル事業連携事務局」も担いました。

本報告書では、これらの事業の取り組み状況を順にご紹介するとともに、本事業の一環で開催した企画展「シガカラー Shiga Color」の出展作者9人を紹介しています。

社会福祉法人グロー（GLOW）～生きることが光になる～



障害者の芸術活動支援モデル事業 概要

● 障害者の芸術活動支援モデル事業概要 ●

概要

障害者の芸術活動支援モデル事業の事業概要を紹介します。社会福祉法人グローは、必須事業である「障害者芸術活動支援センターの設置」、「協力委員会の設置」に加え「調査・発掘、評価発信」と全国5箇所の実施団体間の連絡調整や事業全体の成果の取りまとめを行う「モデル事業連携」を実施しました。

障害者芸術活動支援センターの設置



相談支援

障害のある作者の造形活動に関する相談に応じ、必要な情報を提供しました。8月の事業開始から約7か月間で244回の相談活動を実施しました。



人材育成

福祉事業所の造形活動担当者等の育成を図るため、作者の権利保護をテーマとした研修会の開催や造形活動の実施方法に関する研修会を開催しました。

- (1) 作者の権利を守る研修会の開催(3回実施)
法律家による著作権に関する講演、福祉事業所での著作権等保護に関する実践報告、利用者の作品の取扱に関する規程を作成するグループワークを実施しました。
- (2) 造形活動の実施方法に関する研修会の開催(2回実施)
独自性の高い活動を実施している事業所での造形活動体験と意見交換を実施しました。

調査・発掘、評価・発信



県内の福祉事業所、特別支援学校に協力いただき、作品調査を実施しました。また、有識者による評価委員会を設置して、企画展「シガカラー Shiga Color」への出展作者を選考し、作品の展示方法についての検討を行いました。

「シガカラー Shiga Color」の開催
会場：旧伴家住宅(滋賀県近江八幡市新町3丁目15)
会期：2015年2月21日(土)～3月22日(日)
出展者：9人 入館者数：2,149人

協力委員会の設置

以下のみなさまに参画いただき、協力委員会を設置しました。協力委員のみなさまには、事業実施計画へのアドバイスや事業への協力、事業実施状況の確認をいただきました。

稲田 優花	法テラス滋賀法律事務所 弁護士
岩淵 昌仁	滋賀県立野洲養護学校 教諭
上野 久美子	滋賀県健康医療福祉部障害福祉課 主事
田端 一恵	社会福祉法人グロー(GLOW) 法人本部企画事業部 次長
橋本 悦子	第11回滋賀県施設合同企画展実行委員会 副委員長(きりり庵 支援員)
渡辺 裕也	滋賀県総合政策部文化振興課 副主幹
渡辺 亜由美	滋賀県立近代美術館学芸員

(50音順)



参加型展示会

福祉事業所の職員とボードレス・アートミュージアムNO-MAが実行委員会を組織して企画・展示を行いました。

第11回滋賀県施設合同企画展「ing… ～障害のある人の進行形～」の開催
会場：ボードレス・アートミュージアムNO-MA
会期：2014年11月29日(土)～2015年1月18日(日)
参加施設：30施設 出展者：28人 入館者数：1,099人



関係者のネットワークづくり

第11回滋賀県施設合同企画展の会場において、出展作品の「創作のはじまり」を語り合うギャラリートークを実施しました。それぞれの作品がどのように生み出されたのか、その背景や創作のきっかけについて、作者や支援者に語っていただきました。

作者やご家族、福祉事業所の職員、特別支援学校教諭、学生、行政関係者などが参加し、活発な意見交換が行われました。

創作のはじまりを語り合う ギャラリートーク 『はじまりから広がる「ing…。』』の開催
日時：2014年12月6日(土)、20日(土) 2015年1月10日(土)、17日(土) (いずれも13:30～15:00)
参加施設：16施設 延べ参加者数：112人

モデル事業連携



全国5カ所(宮城県・東京都・滋賀県・奈良県・広島県)で取り組まれている本モデル事業。5つの実施団体をネットワークし、全国的に普及可能な障害者の芸術活動支援モデルの構築を目指します。

実施団体間の情報共有を目的とする連絡会議の開催や、相談支援・人材育成・権利保護に関する事例やノウハウをまとめた事例集の発行、また、全国規模の福祉関連イベントでの実践報告会やウェブサイトでの発信も実施しました。

● 障害者の芸術活動支援モデル事業概要 ●

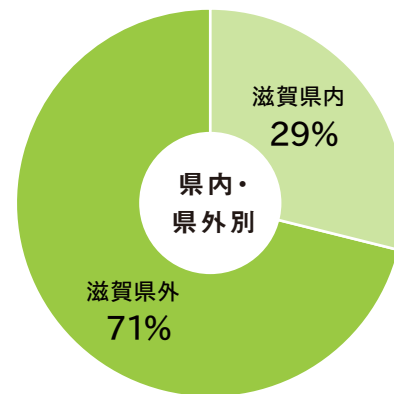
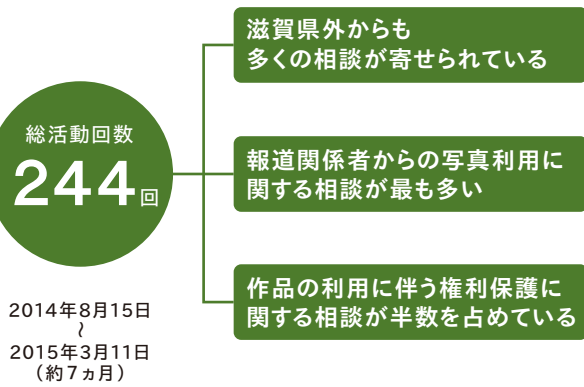


相談支援

障害のある作者の造形活動に関する相談に応じ、必要な情報を提供しました。
8月の事業開始から約7か月間で244回の相談活動を実施しました。

相談件数

県内・県外別、相談者別、相談内容別それぞれの相談活動回数についてまとめました。



相談内容

寄せられた相談内容の一部を4つに分類してご紹介します。

展示機会に関する相談

- ・卒業制作で障害のある人の作品展を企画したいのでアドバイスが欲しい(大学・研究機関)
- ・アール・ブリュットに関する企画展のアートディレクターを探している(福祉事業所)
- ・作品を展示できる場所を探している(作者・家族)
- ・特定の作者に障害者アート展へ出展してもらいたい(福祉事業所)
- ・作品を発表したいので、公募展に関する情報が欲しい(作者・家族)
- ・企画展への出展を依頼したいので、作者に連絡を取りたい(美術館・ギャラリー)

創作環境に関する相談

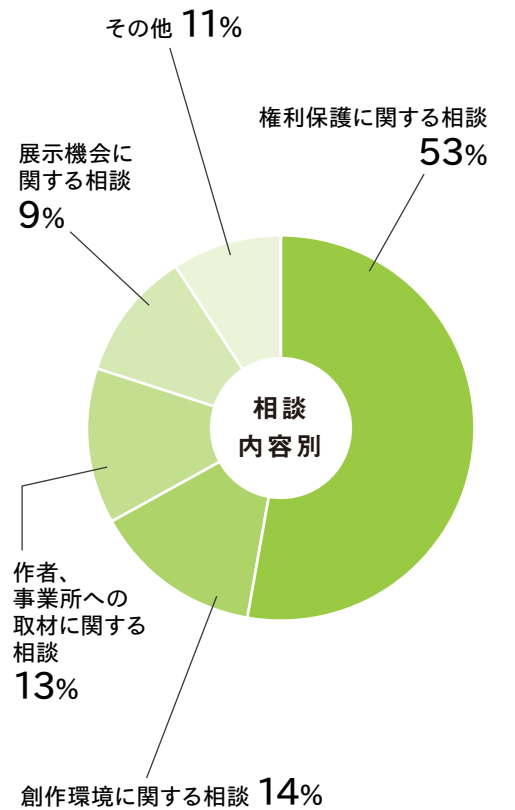
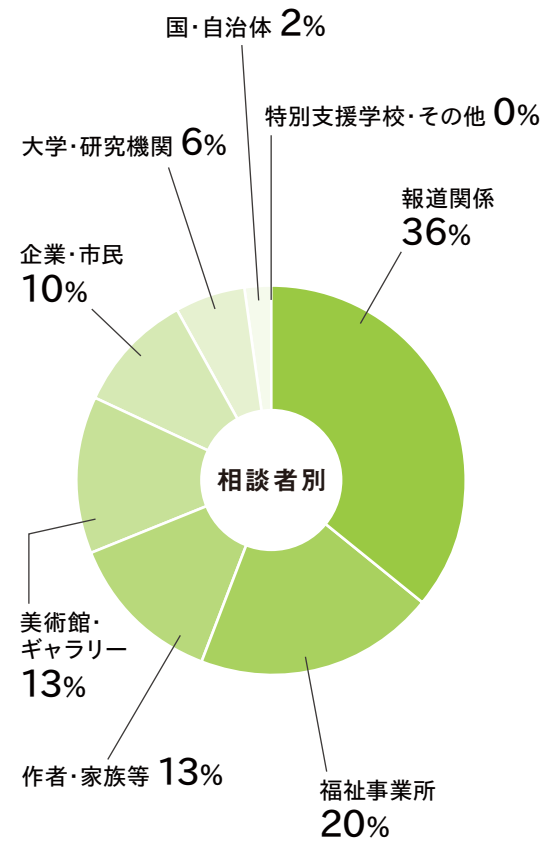
- ・特定の作者の創作現場を見学したいので通っている施設を紹介して欲しい(企業・市民)
- ・創作活動を行っている福祉事業所を探しているので情報が欲しい(作者・家族)
- ・粘土に関する専門的なサポートをしてくれる人を探している(福祉事業所)
- ・絵画教室を探しているので紹介してほしい(作者・家族)
- ・作品のモチーフにするものを探している(福祉事業所)

作者の権利保護に関する相談

- ・作品を二次利用した商品の販売について、作者(利用者)との契約について何に気をつけたらいいか(福祉事業所)
- ・作品出展依頼の様式を提供してほしい(企業・市民)
- ・利用者の作品を販売する際の手続きについてアドバイスがほしい(福祉事業所)
- ・出版されている絵本の挿絵をモチーフに描いた作品を出展する際に、絵本の著作権者の承諾は必要か(福祉事業所)
- ・以前施設で整備した「作品取扱規程」を改訂するのでアドバイスがほしい(福祉事業所)
- ・美術の連載記事に特定の作者の作品写真を掲載したい(報道関係者)

作者、事業所への取材に関する相談

- ・作者のことを取材したいので、作者側に連絡を取りたい(報道関係者)
- ・アール・ブリュットをテーマにしたテレビ番組について作者に出演依頼をしたい(報道関係者)
- ・アール・ブリュットに関する記事を書くため、特定の作者に連絡を取りたい(報道関係者)



利用者の作品を出展するための手続きについて

相談者:	相談概要:
福祉事業所の職員	事業所内でつくられた作品の展覧会を開催するために、利用者（作者）に出展の同意を得たいと相談を受けました。作品の著作権や所有権を誰が有しているか、施設と利用者の間で取り決められていない状況でした。

最初に著作権を保護するガイドラインを紹介

相談者には、参考資料として「障害福祉サービス事業所の造形活動における作品の著作権等の保護のための指針～著作権等保護ガイドライン～（以下、ガイドラインとする）」（2012年3月滋賀県が策定）を紹介しました。ガイドラインには、著作権や所有権など作品に関する権利や成年後見制度の説明、作者の権利保護について目指すべき指針がまとめられています。このなかで紹介されている

「作品取扱規程」は、利用者（作者）と福祉事業所との間で、作品の著作権や所有権の帰属や出展、販売、二次利用等を行う場合の取り扱いを定めたもので、今回のケースでは、この規程を整備することで、作品の著作権等は誰が有し、誰の同意を得るべきか整理されるとともに、今後の造形活動および作品の利用行為において、作者の意思確認を円滑に行えるようになると勧めました。

実態に合った規定の整備に向けた助言

ガイドラインを読んだ施設職員の中には、「このようにしたほうが良いと思うけど、実際に自分の施設にそのまま当てはめて運用することは難しい」という反応を示す方もいます。今回の相談者からは、「ガイドラインでは、収益が発生した場合、必要経費を差し引いた額をすべて利用者に支払うとあるが、生産活動のなかで制作していて、工賃も支

払っているのでこの通りには支払えない現状がある。」と言われました。これに対して、ガイドラインを参照しながらも、活動実態に合う内容をよく協議して取り決めることが大事だとお伝えしました。参考情報として、既に作品取扱規程を整備された施設の収益配分の割合を実例としてご紹介しました。

作品取扱規定・同意書・承諾書を作成し、無事展覧会を開催

約10か月後、施設内で協議を重ねて、作品取扱規程とその同意書、作品展示の同意書、作品二次利用（著作物利用）の承諾書を作成されたと

の連絡を受けました。

また、それらの規程を活用して、作者の同意を得て、展覧会を開催したとのことでした。

アール・ブリュットをテーマとした展覧会を開催したい

相談者:	相談概要:
福祉関係者	ある社会福祉法人からアール・ブリュットをテーマにした展覧会を開催したいと相談を受けました。会期、会場、依頼したい作者は数名決まっているものの、初めての試みなこともあり、展覧会を開催するにはどのような準備が必要かについて全般的なアドバイスを求められました。

展覧会開催について必要な準備工程を説明

展覧会の開催までは大まかに、企画書の作成、作者への出展依頼、チラシ等の印刷物作成、展示仕様の作成、展示設営などの作業工程があることを説明しました。また、企画書に必要な情報は、展覧会名、会期、会場、開館時間、入場料、実施

体制（主催、後援など）、出展者、出展作品、関連イベント、事務局連絡先などがあることを伝えました。今回は、企画提案からしてくれる人材をお探しだったため、NPO法人に所属するアートディレクターを紹介しました。

アートディレクターを紹介し、より具体的な進行方法を助言

後日、依頼者とアートディレクターの間で協議がなされ、出展を依頼する作者が決定したと連絡が入り、これらの作者へ依頼するにあたって改めて相談を受けました。作者に依頼するには、展覧会の企画書と出展依頼書（展覧会名、会期、会場、借用作品、借用期間、作品借用料、実施体制などを示した文書）が必要です。口頭での手続きで

は両者の認識や解釈の違いからトラブルになる可能性があるため、出展についての手続きは書面でされたほうが良いと助言し、参考になる様式を提供しました。また、展覧会チラシなどの印刷物を作成する際には、事前に作者に表記内容を確認してもらうように伝えました。

まとめ

モデル事業が8月中旬ごろにスタートして、約7ヶ月間にアイサで相談対応した活動回数は244回で、うち7割は県外から寄せられています。全国的にアール・ブリュットあるいは、障害のある人たちの作品への関心が高まっていること、また、まだこのような相談に対応できる機関が少ないことを実感します。相談内容の分類では、「2次利用したい：写真掲載したい」が72回、相談者の属性では報道関係者が89回と非常に多いです。これは、当法人で運営しているボーダレス・

ミュージアムNO-MAが、これまでに多くの作者と関わってきたためだと思います。作品写真掲載の相談を受けた場合、相談者から使用目的や掲載料などの諸条件を聞き取り、著作権者や撮影者へ依頼内容を伝達します。その際にも、著作権者の権利保護を意識して丁寧な意向確認を行い、掲載依頼内容を書面に残すようにアドバイスするなど、安心して作品写真を提供できるように十分配慮しています。



人材育成

福祉事業所の造形活動担当者等の育成を図るため、作者の権利保護をテーマとした研修会の開催や造形活動の実施方法に関する研修会を開催しました。

造形活動体験&意見交換会

他の事業所の造形活動ってどんな感じなの？

📌 プログラム

第1回

美術系大学の学生やボランティアと創るアート活動

日時:2014年9月21日(日)10:00~17:00

場所:社会福祉法人虹の会 わになろう

(滋賀県高島市新旭町藁園2607)

参加者:9人(定員10人)

対象者:障害福祉サービス事業所の管理者、造形活動担当者など

10:00~11:30 活動体験__新聞紙、画用紙、クレヨンなどの身近な素材を使って2種類のワークショップを全員で行いました。

11:30~13:00 昼食

13:00~14:15 活動体験__好きな画材を選んで個々で自由に創作をしました。

14:15~14:30 休憩

14:30~15:00 事業説明

15:00~17:00 意見交換

17:00 現地解散

第2回

アーティストとの交流で広がるアート活動

日時:2015年1月24日(土)10:00~16:00

場所:社会福祉法人美輪湖の家 きらり庵

(滋賀県東近江市上中野町397)

参加者:7人(定員10人)

対象者:障害福祉サービス事業所の管理者、造形活動担当者など

10:00~12:30 活動体験__利用者と〈Art from the Lakes〉のアーティストとの絵の具、粘土、紙、糸など様々な素材を使った造形活動に参加。

12:30~13:30 昼食

13:30~14:00 造形活動紹介__活動概要の説明や作品の紹介、企画展に関するお話

14:00~14:05 休憩

14:05~16:00 意見交換

16:00 現地解散



ワークショップ(第1回)



作品発表(第1回)



参加者を交えた意見交換(第1回)



活動体験(第2回)

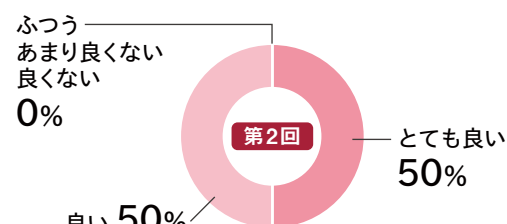
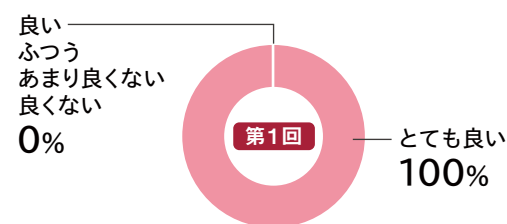


実施施設のスタッフとそのサポートをするアーティストからの実践報告(第2回)

アンケート 第1回 回収率 88.8%(8件)

第2回 回収率 29%(2件)

📌 研修会に参加してみてもいいかなと思ったか



📌 施設の造形活動に反映できそうなことはありましたか

第1回

- ・現在、直接造形活動に関わっていないのですが、反映することはできませんが、地域やアートサポーターとの関わりや、日中の事業所ではないところでのアート活動のあり方が今後の参考になります。
- ・造形活動の席のつくりかた、画材の選び方など物理的なことから、時間の使い方、利用者さんとの関わり方、素材の選び方など参考になることだらけでした。

第2回

- ・作家さんがマンツーマンで対応されている様子を見て、できる限り、横にゆっくり座って、時間をかけてやりとりする姿勢が必要だと感じた。さっそく写真資料等(刺激)参考になる物を持参したい。
- ・なかなか現状の自分の施設では難しいなと思いました。

📌 ご自由に感想をお書きください

第1回

- ・利用者さんの笑顔がとても印象的でした。また寝そべって絵を描いたりリラックスして楽しんでいる姿にほのほのと思いました。
- ・とても楽しく1日過ごさせてもらいました。利用者さんがみなさん熱心に作品に取り組んでおられたのが印象的でした。最後の意見交換でもなるほどと思ったことがたくさんありました。地域と施設が上手く関わっておられるなど勉強になりました。ありがとうございました。

第2回

- ・温かな雰囲気、穏やかなペースでそれぞれの活動に取り組まれる姿に感心しました。広いスペースではないが、一人ひとりの特質に合った一角が確保されていて、居心地が良さそうに感じた。やはり展覧会や造形活動を充実させる為には通常の勤務時間内では難しい現状も伺えた。
- ・私以外に興味のある女性職員もいるので、今後ありましたら共に参加させてほしいです。

まとめ

本研修は、2012年度から2013年度に県内49事業所へ実施した造形活動に関する聞き取り調査の結果「他の事業所で取り組まれている造形活動を知る機会を設けてほしい」や「造形活動を充実させるために美術関係者に関わってほしい」という声が多くあったことから企画しました。

どちらの回も事業所の支援者が「外から来る人の目が入ることで、普段は気付かない利用者の一面や表現の面白さに気付くことができる」という趣旨の話をされたのが印象的でした。特に2

回目の研修では、当初、活動への参加に消極的だった利用者が、画材を自分で選ぶようになったエピソードから、一緒に絵を描いてみることで利用者の感覚に気が付くことがあることや、創作意欲がわく画材選びについて常に心を砕いているという支援者の姿勢をうかがい知ることができました。

結果、参加者の満足度も高く、実際に自分たちの事業所の活動を充実させるための足掛かりとなる研修だったという感想が寄せられました。

障害のある作者の権利を考える研修会

第1回

障害のある人たちの造形活動で大切に考えていること

～ものづくり、療育活動、創作活動という3つの視点から～

日時:2014年12月5日(金)13:30～17:30

場所:草津市立まちづくりセンター
(草津市西大路町9-6)

参加者:25人

対象者:障害福祉サービス事業所の管理者、
造形活動担当者など

13:30～13:45 造形活動における作品の著作権等の
保護のための取組状況の調査結果に
ついて／滋賀県健康医療福祉部障害
福祉課 主事 上野久美子氏

13:45～14:25 実践報告Ⅰ「遊・創・遇・働 ～ここでしか
生まれないものを～」／社会福祉法人
やまびこ福祉会 創作ヴィレッジこるり
村 代表 島田和典氏

14:30～15:10 実践報告Ⅱ「粘土室での取り組み ー造
形活動と感触遊びー」／社会福祉法
人びわこ学園 びわこ学園医療福祉セ
ンター野洲 支援員 水津 哲氏

15:15～15:55 実践報告Ⅲ「施設とアートの間で」／社
会福祉法人グロー(GLOW)～生きる
ことが光になる～ バンバン
管理者 福山良則氏

16:00～17:30 質疑応答・意見交換

第2回

みんなで「作品取扱規程」を つくってみよう!

日時:2015年2月25日(水)15:00～17:30

場所:滋賀県立男女共同参画センター 研修室A
(近江八幡市鷹飼町80-4)

参加者:6人(6事業所)

対象者:障害福祉サービス事業所の管理者、
造形活動担当者など

15:00～15:25 「著作権等保護ガイドライン」の説明／
滋賀県健康医療福祉部障害福祉課
主事 上野久美子氏

15:25～15:35 グループワークの説明／生産活動、余
暇活動、職業指導など活動種別ごと
にグループを編成。グループワークの進め
方を説明。

15:35～16:35 グループワーク／ガイドラインや実際に
事業所で整備された作品取扱規程を
参考に、各事業所の実態に合う内容を
話し合い、それぞれに規程を作成。

16:35～16:50 各グループで作成した「作品取扱規
程」の発表

16:50～17:30 意見交換



研修会

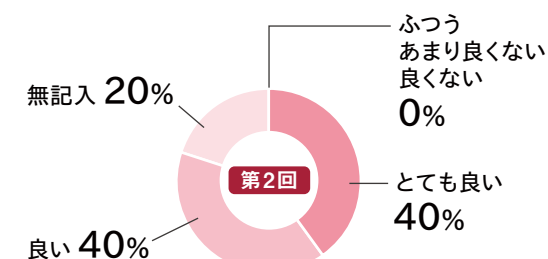
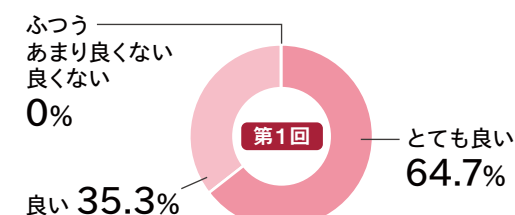


グループワーク

アンケート 第1回 回収率68%(17件)

第2回 回収率71.4%(5件)

研修会に参加してみていかがでしたか



施設の造形活動に反映できそうなことはありましたか

第1回

- ・それぞれに違った取り組み方をされていますが、皆さん各々の大事にしていることや権利を守ることと施設側の事情の間でジレンマなど伝わってきて良かったです。
- ・利用者それぞれの就労の形として造形活動を提案していけるようにしたい。
- ・作品の価格設定に関して参考になりました。

第2回

- ・他施設の具体例を照らし合わせられたので、判断材料になった。
- ・事業所の取扱規程を作成していくきっかけにしたい。
- ・すぐに作成いたします。
- ・各現場スタッフと相談して見直し、上層部へ相談していきたい。

ご自由に感想をお書きください

第1回

- ・20年前に受けた研修では利用者の「人権」や「生きる意味」をいつも確認していました。障害者施設を一旦離れ、今回15年ぶりに福祉の仕事に戻り受けた今回の研修では、利用者の精神的文化的活動について皆が学んでいました。
- ・どんな分野でもあたりまえをあたりまえに考えることを改めて意識できました。

第2回

- ・ガイドラインの必要性をすすめるたたき台が出来そうです。ありがとうございます。
- ・難しかったです。これからは利用者さんと共に考えないといけないと思いました。
- ・今回の研修まで待った甲斐がありました。これで造形活動もっと幅広く行えると思います。(規程がなかったため、販売等はストップしていた)
- ・取扱規程を再確認できて良かったです。

まとめ

滋賀県では、2012年3月に県が「障害福祉サービス事業所の造形活動における作品の著作権等保護のための指針～著作権等保護ガイドライン～」を策定しています。

本研修は、障害のある作者の権利を考える研修と題して、著作権への理解とガイドラインの普及を目的に実施しました。

また、今回の研修に先駆けて、6月に弁護士による著作権についての講義と、既にガイドラインを活用している事業所の実践報告からなる研修を

実施しましたが、その後研修の企画・検討に時間を要したため、開催時期も間が開いてしまったりと結果として連続して参加しにくいスケジュールとなりました。

参加いただいた方からは、各回の研修について「参加して良かった」との感想をいただいているので、次年度に向けては、著作権や所有権についての講義、事業所での実践報告、規程づくりのグループワークを連続して参加いただける研修を企画していこうと思います。



参加型展示会

県内30カ所の福祉事業所とボーダレス・アートミュージアムNO-MAが
実行委員会を組織して企画・展示を行う展覧会を開催しました。

第11回 滋賀県施設合同企画展「ing… 障害のある人の進行形」

会 場：ボーダレス・アートミュージアムNO-MA
(滋賀県近江八幡市永原町上16)
会 期：2014年11月29日(土)～2015年1月18日(日)
開館時間：11:00～17:00
休館日：月曜休館(祝祭日の場合は翌日休館)
2014年12月29日(日)～2015年1月5日(月)
観覧料：一般200円(150円)、高大生150円(100円)、
中学生以下・障害のある方と付添者1人無料
※()内は20人以上の団体料金

主 催：第11回滋賀県施設合同企画展実行委員会、
ボーダレス・アートミュージアムNO-MA
後 援：滋賀県、滋賀県教育委員会、近江八幡市、
近江八幡市教育委員会
協 力：一般社団法人近江八幡観光物産協会、
NPO法人しみんふくし滋賀

出展者： (50音順)
芦田和馬、飯沼美代、池田一仁、一円敏彦、岩根
和恵、岩本賢治、大塚忠文、大捕 萌、奥村庄一、梶
田由華、片山みづほ、川越壮真、木戸口雅俊、黒川
真樹、K.T、清水健生、田邊昭光、津田政美、堤 勝
幸、中川猛義、西沢智博、馬場みち子、古川絹子、
細川啓太、松本孝夫、村田美穂、山本サユリ、山本
壽 計 28人

出展施設： (50音順)
あそしあ、伊香立の杜 木輝、さけり庵、工房和楽、湖
南ホームタウン、湖北まこも、さくらハウス、しあわせ作
業所、滋賀県立近江学園、滋賀県立信楽学園、信
楽青年寮、社会就労センターあおぞら、社会就労セ
ンターこだま、杉山寮、ステップアップ21、大楽、能登
川作業所、バンバン、彦根学園、ひのたに園、びわこ
学園医療福祉センター野洲、ふくらの森、ふれあい
ワークス、ぽかぽか、みどり園、やまなみ工房、ワー
クセンター紫香楽、わになろう

協力施設：
にっこり作業所、蛍の里 計 30施設

来館者数：1,099人(平均来館者数 28.9人/日)



1階展示室



蔵



1階展示室



1階展示室



2階展示室



2階展示室



1階展示室

実行委員会

それぞれの施設から持ち寄られた28人の作品を紹介するため、月1回の実行委員会では、図録担当、展示担当、催事企画担当、広報担当それぞれグループに分かれて、企画準備をしました。その取り組みを通して造形活動を担当する職員同士の交流を深め、展示等の造形活動支援に関する技能向上を図りました。

第1回実行委員会 主な議題> 運営体制について

実行委員の顔合わせ、実行委員長及び副実行委員長の選出、運営スケジュールの確認などを行いました。

第2回実行委員会 主な議題> 作品実見のグループワーク

5人ずつのグループに分かれ、各実行委員が持ち寄った作品を一つひとつ鑑賞し、作品の魅力や特徴を見つけて語り合い記録するグループワークを行いました。

第3回実行委員会 主な議題> 作品実見のグループワーク

各グループの代表者が、作品実見のグループワークで話された感想や気づきなどと併せて、持ち寄られた作品の紹介を行いました。

第4回実行委員会 主な議題> 各担当に分かれての協議

図録担当は仕様の検討、展示担当は出展作品の確認と展示構成の検討、広報担当はメインビジュアルに使用する作品の選出と広報計画の検討、催事企画担当は関連イベントの検討を行いました。

第5回実行委員会 主な議題> 各担当に分かれての協議

図録担当は仕様案の作成、展示担当は展示・キャプション案の検討、広報担当はプレスリリースの作成、催事企画担当は関連イベントの検討を行いました。

第6回実行委員会 主な議題> チラシデザインの決定

チラシデザイン案について意見交換を行いました。その後、図録担当は寄稿文依頼者の選定、展示担当は展示構成の検討、広報担当はプレスリリースの作成と広報施策の検討、催事企画担当は関連イベントのギャラリートークの進行について協議を行いました。

第7回実行委員会 主な議題> 各担当に分かれた準備

図録担当は校正作業、販売促進用のポップ作成、展示担当は搬入スケジュール、キャプション、館内配付資料について協議、広報担当はSNSの活用について協議、催事企画担当は関連イベント(主にパフォーマンス)について検討を行いました。

第8回実行委員会 主な議題> 開催経過報告

来場者数、イベント開催状況、メディア掲載状況について開催経過報告を行いました。

第9回実行委員会 主な議題> 開催経過報告

来場者数、イベント開催状況、メディア掲載状況について開催経過報告を行いました。催事企画担当で検討した勉強会の講師依頼について意見交換を行いました。

第10回実行委員会 主な議題> 開催報告

展示会の開催結果や実行委員会の運営について振り返りました。

勉強会の開催

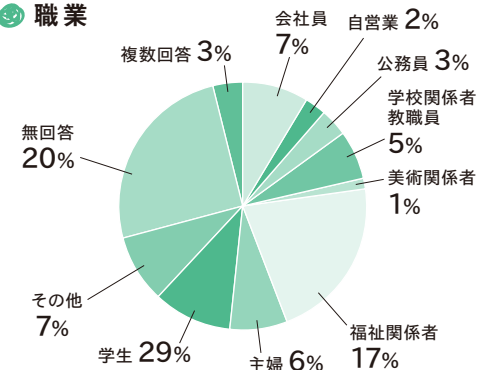
実行委員を対象とする勉強会を催事企画担当が企画し、下記の日程で開催しました。

タイトル:発達障害の不思議な感覚 感覚統合療法&スヌーズレンの実践から
日時:2015年3月6日(金)18:30~20:30
場所:滋賀県近江八幡市立マルチメディアセンター(滋賀県近江八幡市出町645-4)
講師:太田篤志氏(株式会社アニマシオン プレイジム代表、姫路獨協大学客員教授)
参加人数:29人

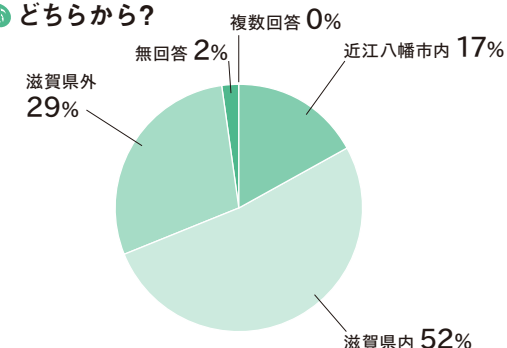
アンケート 回収率 24.6%(270件)

第11回 施設合同企画展「ing… 障害のある人の進行形」の来館者のアンケートを紹介します。

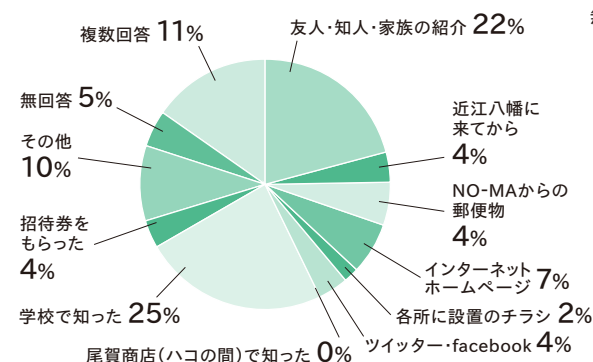
① 職業



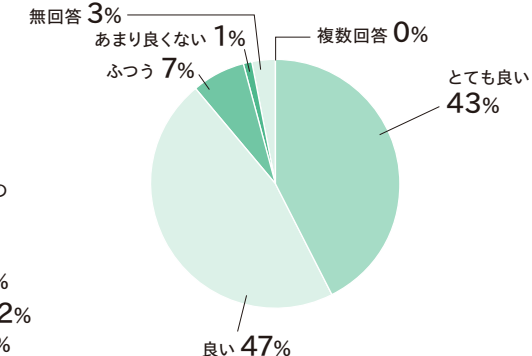
② どちらから?



③ 何で知ったか?



④ 展示会はどうですか?



⑤ ご自由に感想をお書きください

- ・どれも心が解放されていていいです。作者の思いを汲む人が側にいると、素晴らしい作品が生まれるのですね。(60代 女性)
- ・「自由!」っていうところが気に入りました。(50代 女性)
- ・“今”を生きること、作品のひとつひとつに込められたメッセージに考えさせられました。色づかいがすごい!!(30代 男性)
- ・表現することを持つ人は幸せだなと感じます。(50代 女性)

- ・今までみたことの無い芸術を見て新鮮でした。(20代 女性)
- ・全ての作品にそれぞれの方の心がこもっていると感じました。吸い込まれるように見入ってしまいました。(20代 女性)
- ・とても上手でした。僕達にはできない感の絵でした。変わった作品ですごくおもしろい作品ばかりでした。(10代 男性)

まとめ

今回で11回目となる滋賀県施設合同企画展は、滋賀県内の造形活動に関する情報を全国に向けて発信することと、造形活動を担当する職員間の交流及び職員の展示技術、造形活動支援の技術向上を図るため実施しました。

今回参加を希望した福祉事業所は30カ所となり、それぞれの事業所の担当者と事務局となるNO-MAによる実行委員会を組織しました。

実行委員会内に、展示担当、広報担当、図録担当、催事企画担当を設け、4回目の実行委員会からはそれぞれの担当グループ毎に準備を進めました。また、実行委員長と4人の副実行委員長(各担当リーダー)による運営会議を設け、各担当の準備を円滑に進めるため随時、役割などを調整しました。



関係者のネットワークづくり

第11回滋賀県施設合同企画展の会場で、出展作品の「創作のはじまり」を語り合うギャラリートークを実施しました。それぞれの作品がどのように生み出されたのか、その背景や創作のきっかけについて、作者や支援者に語っていただき、参加者同士で意見交換をしました。

創作のはじまりを語り合うギャラリートーク

はじまりから広がる「ing…」

2014年12月6日(土) 13:30～15:00
きらり庵(東近江市)
能登川作業所(東近江市)
やまなみ工房(甲賀市)

2014年12月20日(土) 13:30～15:00
工房和楽(東近江市)
杉山寮(高島市)
びわこ学園医療福祉センター野洲(野洲市)
わになろう(高島市)

2015年1月10日(土) 13:30～15:00
湖北まこも(長浜市)
バンバン(湖南市)
ぽかぽか(大津市)
みどり園(大津市)
パフォーマンス: 湖南ワークショップグループ(にっこり作業所)

2015年1月17日(土) 13:30～15:00
信楽青年寮(甲賀市)
社会就労支援センターあおぞら(大津市)
ステップアップ21(豊郷町)
ひのたに園(日野町)
ふくらの森(長浜市)

延べ参加者数: 112人



第1回



第3回



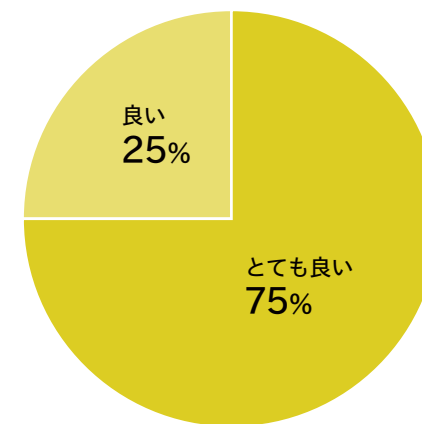
第2回



第4回

アンケート

② ギャラリートークに参加してみたいかがでしたか？



③ 情報交換の場づくりのために、必要だと思うこと

- ・お茶菓子を用意して交流会をやってみてはどうか。作業所でつくってるようなクッキーとか。
- ・県全体で束ねる機能が必要か。
- ・アール・ブリュットとか絵画、障がいのあるお子さんに場所をとるので習い事的な場所も増えました。でも、その場に行ってもというだけでなく、日常家庭でやっているというような作品にもすてきなのがいっぱいあります。そういうのをもっと発見できるとステキやのになと思います。
- ・発表の場、機会がいろんな所でできると良いと思います。

④ 印象に残ったお話

- ・堤さんとびわこ学園の方のやりとりとかコミュニケーションのとり方の話が印象的でした。又、施設の方(今回4人の方)目線のやさしさがとても良かったです。
- ・作品を仕上げる時の活々とした表情が良かったと言うお父様のお話しが良かったです。
- ・ご本人がみんなの前で絵を描いて下さったのが心に残りました。制作風景のビデオも魅力的でした。観客もさそわれて一緒に踊る姿は同じ体験を共有することができる良い表現だと思いました。
- ・一円さんのお話。精神安定や生活の一部であるということ。
- ・一円さんのお話で「欠かせない営みになってしまっている」とのことです。

⑤ 感想

- ・人同士がていねいに向き合う(向き合いづらい)現代では、障害ある方の作品やその作品の生まれる環境、職員の方とのやりとりが一層大切なもの、こと、となっていくと思います。
- ・創作活動を通して、人とのコミュニケーションを拡げていく方、精神のバランスをとろうとされる方…今まで、このような展覧会のキャプションを通して、作者の姿を拝見してきましたが、「生の声」「生の表情」を伺うことができ、創作=作品づくり、というだけでなく、創作に生きる証を残すことなんだなと強く感じました。
- ・前回見させてもらった時より、説明が加わることで違った見方ができて良かったです。

まとめ

各回とも実行委員の催事企画担当が進行をつとめ、出展作者とその支援者が、作品がつけられる最初の瞬間や作者が造形活動に出会ったきっかけなどを紹介しながら展示作品を紹介していきました。なかには出展者が公開制作を行うこともあったり、映像や写真パネルを用意して話をするなど趣向を凝らしたプレゼンテーションが行われる場面もありました。

作品を紹介している最中に出展作者から参加者に声をかけたことがきっかけとなり、場がな

ごみ、自然と参加者から質問が投げかけられるなど、参加者同士の交流が図られるギャラリートークになりました。

障害のある作者の造形活動に関心のある人たちのネットワークづくりを目指し、広く参加を呼び掛けた結果、作者の家族や福祉事業所職員はもちろんのこと、特別支援学校の教員、行政関係者、ギャラリー関係者など多くの方々に参加いただくことが出来ました。



調査、発掘・評価、発信

県内の福祉事業所、特別支援学校に協力いただき、作品調査を実施しました。
また、有識者による評価委員会を設置して、企画展「シガカラー Shiga Color」への
出展作者の選考、作品の展示方法についての検討を行いました。

評価委員



井上多枝子

1978年、大阪府生まれ、京都精華大学造形学科卒業。知的障害者施設に入職し全国的に展覧会を開催。開館前からボードレス・アートミュージアムNO-MAに関わり、2年ほどアジア、アフリカ旅行を経て現在、知的障害者施設のアトリエを担当しながらNPO法人のアートディレクターを兼務。展覧会企画、障害者の作品発信を展開。



大西暢夫

東京総合写真専門学校卒業後、写真家／映画監督の本橋成一氏に師事。1998年にフリーカメラマンに。2001年から精神病院に長期入院する人々の姿を専門誌のグラビアを通して撮影を始める。そのことがきっかけとなり、日本国内におけるオール・ブリュットの作品とその作者の取材を多数手がけるようになる。2010年に写真集『アウトサイダーアートの作家たち』（角川学芸出版）を発行。



はたよしこ

ボードレス・アートミュージアムNO-MAのアートディレクター。2004年に開館した日本ではじめてオール・ブリュット作品を扱う美術館、ボードレス・アートミュージアムNO-MAのアートディレクターに就任し、多くの企画展を開催してきている。また、数力所で障害者のアトリエを開き制作のサポートをしている。



渡辺亜由美

1984年千葉県出身。東北大学文学部卒(美学・西洋美術史研究室)、大阪大学大学院文学研究科博士前期課程修了(西洋美術史研究室)。2014年より滋賀県立近代美術館学芸員。

調査・発掘

予備調査

ボードレス・アートミュージアムNO-MAの学芸員が、県内の作者、作品について予備調査を実施しました。

予備調査では、まず、滋賀県内で暮らす障害者を対象とした公募展「ぴかtoアート展」の2次

審査の会場に訪問しました。そこで面白いと感じた作品をピックアップし、その後その作者の一部が所属する障害福祉サービス事業所や特別支援学校へ実際に訪問し、32人の作品情報を整理しました。

評価

評価委員会

2014年12月26日に評価委員会を開催しました。会場は、企画展の開催会場内の会議室で実施しました。冒頭、障害者芸術活動支援モデル事業の全体概要について事務局から説明し、その後、予備調査をした32人の作品を順に事務局から紹介しました。作品の紹介を聞いた評価委員からは、作者の活動場所や制作の開始時期、作品の制作量についての質問がありました。

全ての作者を紹介した後、4人の評価委員それぞれ1、2人の作者を選考していただきました。選出される作者が重複したり、2人までに絞りきれない場合は、適時調整しながら11人の作者を選びました。

次に、実際にどのように発信(展示)するか検討するため、企画展を開催する会場を下見していただきました。実際に会場を評価委員に見ていただくことで、作者1人当たりの展示スペースの規模は共有できましたが、どのように展示するかについては、実際に作者と出会ってみないと検討できないとの意見もあり、評価委員による調査を実施することとしました。

調査及び発信方法の検討

評価委員による作品調査と企画展で展示するための展示方法の検討を下記の日程で行いました。

・評価委員による調査(10回)

- 1月7日(水) 野洲養護学校：大西委員
- 1月14日(水) ぼおずき作業所：渡辺委員
やまなみ工房：渡辺委員
- 1月16日(金) ユースサポートネットとも：はた委員
近江学園：はた委員
- 1月21日(水) 野洲養護学校：井上委員
- 1月22日(木) わになろう：はた委員、井上委員
- 1月27日(火) ワークセンター紫香楽：大西委員
- 1月30日(金) 創作ヴィレッジこるり村：井上委員

・発信方法の検討(3回)

- 1月19日(月) 滋賀県立近代美術館：渡辺委員
- 1月22日(木) わになろう：はた委員、井上委員
- 1月27日(火) 社会福祉法人グロー(GLOW)：大西委員



発信

シガカラー Shiga Color

会場：旧伴家住宅
 (滋賀県近江八幡市新町3丁目15)
 会期：2015年2月21日(土)～3月22日(日)
 開催時間：10:00～17:00
 休館日：月曜日休館 入場無料
 主催：社会福祉法人グロー(GLOW)
 ～生きることが光になる～
 協力：滋賀県立近江学園
 滋賀県立野洲養護学校
 (社福)しがらき会 信楽青年寮
 (社福)しがらき会 ワークセンター紫香楽
 (社福)たかしま会
 (社福)虹の会になろう
 (社福)やまびこ福祉会
 創作ヴィレッジこるり村
 (社福)やまなみ会 やまなみ工房

出展作家：
 岩瀬俊一、土屋雅顕、小川秋夫、本城直、
 西村一幸、井上晴人、木村圭吾、西尾政二、
 川越壮真

来館者数：2,149人(平均来館者数 82.7人)



まとめ

企画展「シガカラー Shiga Color」の開催にあたり、2014年10月から県内の福祉事業所、特別支援学校等の協力を得て、延べ18回の作品調査を実施しました。

また、有識者4人による「評価委員会」を設置して、出展作家の選考を行うとともに、その作品のもつ魅力を伝えるための展示方法についての検討も行いました。

展示方法を検討するプロセスでは、評価委員それぞれが作者の制作現場に赴き、作品が生

み出される場面を丁寧に観察していました。また、作者やその関係者から制作に関する事柄を丹念に聞き取っていました。

そこでは、人の表現を大切に受け取るという、人間にとって肝要な姿勢を目の当たりすることができました。作品を評価するということは、単に優劣をつけるということではなく、人の表現に真摯に向かい合うことだということをあらためて知ることができました。

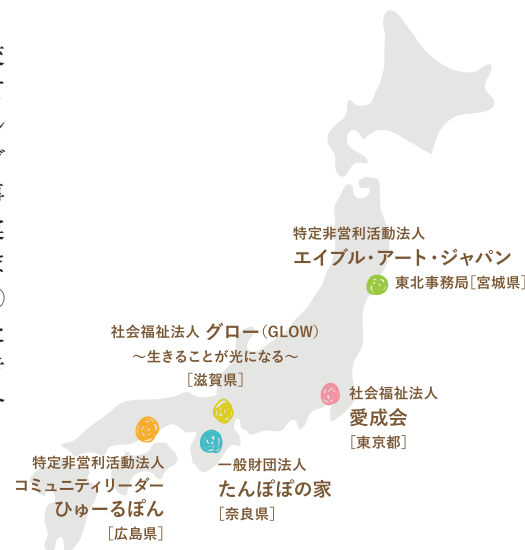


モデル事業連携

本モデル事業は、全国5カ所(宮城県・東京都・滋賀県・奈良県・広島県)で実施されました。
5つの実施団体をネットワークし、全国的に普及可能な障害者の芸術活動支援モデルの構築を目指し、以下の事業に取り組みました。

事業の概要

実施団体間の連絡調整や情報共有・意見交換を行う連絡会議の企画、モデル事業全体としての成果のとりまとめを行うために設置されるモデル事業連携事務局を滋賀県(社会福祉法人グロー)が担いました。連絡会議のほか、モデル事業実施団体向け勉強会や実践発表会の企画実施、ウェブサイトによる情報発信などを主に行いました。また、各団体での取り組みを①相談支援、②支援人材育成、③権利保護の3つの切り口でまとめた事例集を発行し、地域特性に応じた障害者の芸術活動支援に資する多くの取組事例を紹介しています。



各実施団体紹介

特定非営利活動法人 エイブル・アート・ジャパン

1995年から「エイブル・アート・ムーブメント(可能性の芸術運動)」を提唱し、アートの可能性や人間の可能性を再発見する活動をすすめています。障害のある人たちが表現活動を通じて自らを表現する機会をつくること、障害のある人たちに對する社会的なイメージを高めること、また子どもや高齢の人をはじめ、すべての人が表現の楽しさや自由を再発見し、本当の意味で豊かな社会や文化を創造することをめざしています。

社会福祉法人 愛成会

愛成会は、中野区に生まれてから50年以上の歴史を重ねている社会福祉法人です。2000年4月、一法人一施設から中野区にある社会福祉法人の役割として地域福祉の創造も含め「誰もが安心して暮らすことの出来る街づくりへ」「施設と共に社会創りへ」と法人の目指す方向を見直し、街で暮らす事に必要な資源の創設を始めています。

一般財団法人 たんぽぽの家

「アート」と「ケア」の視点から、多彩なアートプロジェクトを実施している市民団体です。ソーシャル・インクルージョンをテーマに、アートの社会的意義や市民文化について問いかける事業を実施しています。国内外の団体とネットワーク型の文化運動を展開し、より公共性の高い仕事に取り組んでいます。

社会福祉法人 グロー(GLOW) ～生きることが光になる～

2004年、障害のある人の生み出す表現の可能性を世に広く伝える場としてボーダレス・アートミュージアムNO-M Aを開館しました。NO-M Aでは、企画展の開催や全国・アジア地域の作品調査、国内外の美術館等との連携企画を実施しています。また、2012年にはアール・ブリュット インフォーメーション&サポートセンター(略称:アイサ)を開設し、障害のある人の芸術活動に関する相談支援や人材育成、作者の権利保護等に関する取り組みを行っています。

特定非営利活動法人コミュニティリーダー ひゅーるぼん

ひゅーるぼんは、子どもたち、障がいのある人たちが、地域の人たちが、共に、いきいきと楽しく相互につながりながら、あたたかにくらしていける街をめざして、そのための支援とまちづくりの活動を行っています。また、ボランティア育成やまちづくりなど地域に向けての活動や情報発信にも努めています。特にアートを通したまちづくりではアートの持つ力を最大限に生かし、日々の生活の中で障がい者アートが身近にあふれるまちづくりを行っています。

連絡会議



- 第1回 2014年9月17日(水) 13:00～15:00
経済産業省別館1031会議室
- 第2回 2014年12月8日(月) 13:30～15:30
3331 Art Chiyoda B105
- 第3回 2015年2月23日(月) 13:30～15:30
中野サンプラザ研修室4

5つの実施団体が一堂に会し、事業進捗の確認や連携して取り組む事業(実践発表会や事例集など)についての意見交換を行いました。また、共通したフォーマットによるデータ蓄積のため、相談支援の分類についても協議し、相談者や相談内容についての傾向も分析できるよう検討しました。

巡回訪問

- 第1回 2014年10月～11月 (10/21奈良県 | 10/27東京都 | 10/28宮城県 | 11/4広島県)
- 第2回 2015年2月～3月 (2/14広島県 | 2/23東京都 | 2/26宮城県 | 3/1奈良県)

第1期の訪問では事業計画の確認と連携事業に関する要望等をヒアリングし、各団体の拠点や普段の活動の様子を見学して回りました。また、第2期の訪問では、各団体の実施する参加型展示会やイベントなどを視察し、約半年間で積み上げられた事業の成果を確認しました。



勉強会



- 第1回 2014年12月8日(月) 15:30～17:30
3331 Art Chiyoda B105
- 第2回 2015年2月23日(月) 13:30～15:30
中野サンプラザ研修室4

モデル事業実施団体向けの勉強会を企画・実施しました。相談支援に関する事例検討を中心に、連絡会議のオブザーバーとしてご協力いただいている中久保満昭弁護士を交えてグループワークやディスカッションを行いました。



実践発表会

日時:2015年2月7日(土)14:00~16:30
会場:大津プリンスホテルコンベンションホール淡海
(滋賀県大津市におの浜4-7-7)

14:00~
事業説明「障害者の芸術活動支援モデル事業」について／川又竹男(厚生労働省 社会・援護局障害保健福祉部 企画課長)

14:45~
実践報告&パネルディスカッション
「障害のある人の芸術活動に必要な支援とは?」

- ・特定非営利活動法人 エイブル・アート・ジャパン [宮城県]／代表理事 柴崎由美子
 - ・社会福祉法人 愛成会[東京都]／法人企画事業部 事業推進課長 小川由香里
 - ・社会福祉法人 グロー(GLOW)~生きることが光になる~[滋賀県] アール・ブリュットインフォメーション&サポートセンター／アドバイザー 木元聖奈
 - ・一般財団法人 たんぽぽの家[奈良県]／常務理事 森下静香
 - ・特定非営利活動法人 コミュニティリーダー ひゅーるぼん[広島県]／アートサポートセンター ひゅるる スタッフ 保田香織
- 参加者数:156人

2月7日、滋賀県の大津プリンスホテルで実践報告会を開催し、156人と多くの方にご参加いただきました。まず、厚生労働省の川又企画課長から日本における障害者の文化芸術活動の状況についてお話いただきました。昨年に国が設置した「障害者の芸術活動への支援を推進するための懇談会」での議論を踏まえて今年度からこのモデル事業がスタートしたことなど、この間の経緯についてお話があり、最後に2020年に開催される東京オリンピック・パラリンピックに向けて様々な文化プログラムが展開される中で、日本の障害者の芸術活動が世界に向けて発信されるよう、一生懸命応援したいとの言葉で締めくくられました。



後半の実践報告では、登壇者それぞれから団体紹介とこの間の取り組みについてお話いただいた後、モデル事業の実践を通して見えてきたこととお話いただきました。

宮城では、障害者の芸術活動に取り組む福祉事業所自体が少ない中で、モデル事業が始まったことを伝え、広げるということに力を入れた結果、相談やオフアが届けだしたとのこの間の経緯の紹介がありました。東京からは、既に取り組んでいる福祉事業所や作者から、「活動を充実させたい、作品を展示したい」という声が多く寄せられていることで、作品を発表できる機会に関する情報をまとめ、提供する必要性を感じたとのこと、滋賀県からは、県が著作権保護ガイドラインを策定している地域の実状に触れ、ガイドラインを活用した研修会の開催を通して権利保護への取り組みが広がっていること、奈良県からは、参加型展覧会の実施を契機に、福祉事業所間のネットワークや学び合いの機会が広がったという事業の効果が紹介されました。最後に広島から創作活動の充実ためのワークショップの開催を求める声が多い人材育成や活動へ支援が必要との報告もあり、モデル事業を実施した中で得た成果と今後の課題がそれぞれの実施団体から語られました。

発信・記録

事例集



本モデル事業で得られた成果を、障害者の芸術活動支援モデルとして全国に普及する目的で①相談支援、②支援人材育成、③権利保護の3つの切り口でまとめました。①相談支援については、各実施団体に共通してみられる「よくある相談事例」と各団体に寄せられた「特筆すべき事例」を紹介。②支援人材育成では地域の現状と課題を踏まえて、各団体の実施した人材育成プログラムの構成とねらいをまとめています。また、これから支援人材育成に取り組む支援者のために各実施団体で招へいた講師一覧リストも添付しました。③権利保護には、実施団体ごと代表的な権利保護の取り組みの概要とその成果や課題について記しています。

ウェブサイト

2014年12月開設 <http://renkei-sgsm.net/>



全国5ヶ所で実施する本モデル事業について広く情報を発信する目的でウェブサイトを制作しました。事業概要のほか、各実施団体からのセミナーや展覧会などのお知らせやレポートを掲載しました。

ポスターセッション 2015年2月6~8日



福祉関係者の集う全国規模のイベント、アメニティフォーラムにて本モデル事業を紹介するブースを出展。全国から集まった来場者に向けて、各実施団体が取り組むセミナーや展覧会、相談支援センターなどをPRしました。

まとめ

モデル事業連携の実施に当たり、私たちは、ソフトウェア開発で良く使用される「インセプションデッキ」を活用して、連携事業が目指すものやそのゴールに向けた業務の優先順位を徹底的に議論しました。

そして連携の目的を「障害者の芸術活動支援モデル構築とその全国普及」としました。

また、業務の優先順位では、このモデル事業がほぼ9月に入ってから事業スタートとなったことを受け、「期限を死守する」ということと、全国5カ所の成果をもれなく取りまとめるために「各実施団体

の事業の実態を把握する」ということ重点を置くこととしました。

これまで紹介した事業を実施し、それぞれの実施団体との連携を図る中で見えてきたことは、取り組みが地域の実情に応じて多様であるということ、また、地域は違っても共通して求められる取り組みがあるということです。まだ半年の実施期間で具体的な結論には辿りついていませんが、今回連携事業の成果として発行する「事例集」にそのことを表現してみましたので是非ご覧ください。

■ まとめ

私たちがボーダレス・アートミュージアムNO-MAを開設して11年目、障害者造形活動支援センター（事業所名：アール・ブリュットインフォメーション&サポートセンター〔略称：アイサ〕）を開設してから3年目の今年、障害者の芸術活動支援モデル事業がスタートしました。本モデル事業では、アイサでこれまで実施してきた障害者の芸術活動に関する相談への対応や、支援者の育成、関係者のネットワークづくりなど本報告書で紹介した事業メニューが全国5カ所で展開されました。（調査・発掘、評価・発信は2カ所、モデル事業連携は1カ所で実施）このモデル事業によって今後、今年度を含む概ね3年間で支援モデルを構築していくとされています。

今年度取り組んだモデル事業連携で把握した全国の実施団体の事例と、アイサやNO-MAのこれまでの実践を通して、支援モデルを構築するために特に大切だと感じた事柄を3つ記したいと思います。

まず、造形活動の現場を知るということです。アイサを開設した際も「造形活動を実施する障害者福祉サービス事業所等への聞き取り調査」を2年間実施しました。調査で49カ所の造形活動現場を訪問した結果、造形活動の充実を図りたいと願いつつも、知識や人脈が無く、どのように活動を展開して良いか考えあぐねている状況や、利用者の権利に配慮した作品の取扱を必要と感じつつも実践に結びつかないジレンマを抱えている状況があること等を知り、そのニーズに基づいた事業内容を企画しました。モデル事業においても実施地域のニーズ調査を行い、効果的な事業を展開していた地域があったことから、支援モデルの構築にあたっては、造形活動現場のニーズ把握が大切と言えます。

つぎに、相談支援の実施を通して障害者の芸術活動に関係する様々な立場の人たちのニーズを知るということです。アイサに寄せられた相談から、造形活動支援に必要とされている情報やノウハウが見えてきたという実績があります。例えば、作者やその家族から作品を発表する機会を求める相談が寄せられたことから、展示機会（公募展等）に関する情報を収集整理したり、報道関係者から紙面への掲載などの相談が寄せられたことから、作品の写真を利用する際の依頼様式などを整えたということがありました。今後も全国の実施団体に寄せられる相談を通して、支援に役立つ情報や支援ノウハウが積み上げられていくことが期待されます。

最後に、多分野に支援ネットワークを広げる方法を共有することです。滋賀県では、施設合同企画展の開催を通して県内の福祉事業所のネットワークは構築されつつありますが、障害者の芸術活動支援を推進していくには、福祉分野だけでなく、美術や法律、教育など多様な分野の協力が必要であることは言うまでもありません。全国の取り組みの事例を参考に、地域でのネットワークの構築方法について、モデルを示すことは、芸術活動支援を推進するうえで大切な取り組みと言えます。

障害のある人たちが安心と希望を持って芸術活動に取り組む環境づくりを進めるため、全国の実施団体はじめ様々な関係機関と連携しながら、障害のある人の芸術活動に必要な支援についてこれからも考え続け、支援モデルの構築とその普及に努めたいと思います。

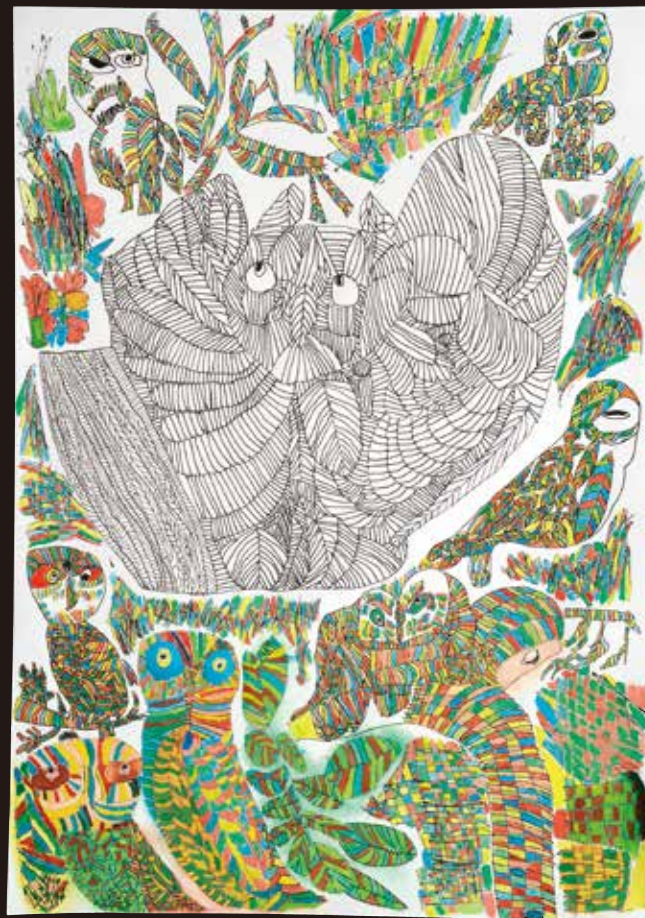
シガカラー

Shiga Color

出 展 作 家 紹 介



岩瀬俊一 IWASE Shunichi 1973生まれ



岩瀬は現在「きれいなお姉さん」というテーマで、大小の人物たちが1つの画面で踊り、戯れるかのような作品を、驚くほど細かな線によって描いている。中でも目を引くのは、画面のあちこちに描き込まれた渦巻き模様だろう。渦巻き模様が密集する髪の毛はまるで螺旋髪のようにあり、大きく開いた両手の指先では指紋になる。渦巻き模様と細かな点と線を組み合わせると、時にボタニカルな、また時にエキゾチックな雰囲気漂わせる衣装が表れる。作品によっては大きな人物の顔や身体の中に更に小さな人物達が増殖し、渦巻き模様や、点と線による長いピアスのような装飾、葉脈のように描かれた線が隙間を埋めていく。人物達の多くはにこやかな表情をしているが、怒りのような、嫉妬のような表情を浮かべている人物も時折登場する。岩瀬は、まず大きなモチーフから先に描き、その隙間を埋めるようにして小さな人物を配していくという。

このように、現在はたくさんの人物が登場する緻密なモノトーンの世界を好んで制作をしているが、以前はカラフルな色彩による動物達の世界を描いていた。その時期の作品は、同じ方向に引いた線のまとまりを1つのユニットとし、それ

をパッチワークのようにいくつも組み合わせた描き方がよく使われている。こうして生まれた縦や横のリズミカルな線描は動物の毛並みを表現しているかのようである。《ふくろう》はそうした時期の代表的な作品である。細かな線で描かれた中央のふくろうは白と黒で表現されており、その周りを取り囲む動植物は鮮やかな色彩がモザイクのように施されている。その後色彩は影をひそめ、モノトーンだけで動物を描き始める。時には絵の具の黒色を使って背景を塗りつぶす方法も試みていたが、ペンで画面をびっしりと埋め尽くす制作スタイルに出会ってからは、線による動物と、ペンで執拗に埋めつくされた背景による作品制作を好むようになった。「きれいなお姉さん」シリーズの制作に取りかかったのは2014年4月からである。画面に渦巻き模様が表れるのは、これ以降のことだ。

動物シリーズから「きれいなお姉さん」シリーズに至る過程を見てみると、線による濃密な画面構成というスタイルは一貫しているものの、ソリッドな表現が徐々に姿を消し、柔らかく、そしてどこか神秘的な画面へと変化しているように感じる。（渡辺亜由美）



P30上:岩瀬俊一「きれいなお姉さん」2014年 紙、ボールペン 767×1087(mm)

P30下:岩瀬俊一「ふくろう」2013年 紙、ボールペン、水彩絵の具 540×380(mm)



井上晴人 INOUE Haruto 1998年生まれ



電車、電車。生活の中に電車ばかりである。
多くの男性アールブリュット作家がテーマにしている電車。

車両の種類を集めたり、駅名、車体番号、行き先、色やマークなど、コレクション要素がたくさん含まれた媒体である。

井上晴人君も、その一人。

電車がいつも近くにいる環境や、自分なりの心地よいコレクションによって、満たされている。

自宅の近くを走るJRの電車は、日常の風景。いつも彼の生活の中に電車が走っている。

毎日、通学で使っているカバンの中には、自分が作った電車図鑑やノートなどでいっぱいだ。

毎日、歩いて運んでくる労力など、無駄なように思うが、好きなことが最優先。苦になることはないと言う。

そのノートは、『でんしゃ大ずかん』と題され、作・井上晴人と、自分で装丁まで考え、最後の奥付にはプロフィールまで書かれていた。

一ページに電車の前面が書かれ、その中に運転手の姿を必ず描かれている。カッコいい存在であろうが、実はその運転手は、将来の自分ではないかと思うのだ。

電車に囲まれていたい状況は、リアリティを求めたカタログ的な写真ではなく、自分の描いた電車にこだわっている。

『晴人鉄道』と架空の会社も描き、架空の路線図の中に自分の名前の駅まで出てくる。

自分が経営する鉄道会社の中で、自分が好きな車両を運転し、自分の駅で乗客を下車させる。

晴人鉄道ワールドがノートに詰まっている。

今回の展示の目玉となるのは、『電積(でんつみ)』である。2センチ角ほどで長さ5センチほどの角材に、車両の前面や側面にペンで描いている。

その木片電車をピラミッドのように積み上げたのが『電積』。木に巻き付けるように紙を張り、そこに描いたものもあるが、直接、木片に描いたものもある。

数を見せることがとてもユーモアがあって、面白い。そしてなんとも可愛らしいものになる。

インタビューしている間も、帰る時間が迫り、そわそわと落ち着きがない。

いつもの帰る時間になると、電車が駅を定刻通り出発するように、自分も時間通りに学校を出発し自宅に帰っていった。(大西暢夫)



小川秋夫 OGAWA Akio 1951年生まれ



おもむろに引かれた線は、その後の色塗りによって消えていく。紙上に線を引くとそれが境界線のように感じられるものだが、彼はその一本の線からできあがるあっちとこっちの世界を、作ったり塗りつぶしたりしながら変化させ、その狭間を楽しんでいるように絵を描く。線は顔のような輪郭を形作っている時もあれば、湾曲した何ということはない模様のようなときもある。

彼は現在、月に二回ある通所施設のアート活動の時間に絵を描いている。何種類かある色画用紙の中からその日その日の色を選び、クレヨンやペンといった画材で描いていく。四角や半円といった単純な線で画面を描き、クレヨンを違う色に持ち替えてその線をなぞる。顔の中に模様を描いたりする。

ふと見ていない間に、それまで描いていた線が見えなくなっていく。様々な色で上から塗り込められていくのだ。気づくと顔らしき中も塗られ、色を替えては違う方向から塗り込められていく。画用紙を左手で押さえ、画面からクレヨンがはみ出ないように丁寧に。赤で塗った上に青、その上に灰色、そしてピンクというようにクレヨンは混ざって不思議な色になっていく。その過程で最終的に画面すべての線がなくなることもある。

「どうしてこうなるのか、誰にもわかりません」

アート活動を担当している職員が言った。彼との簡単な単語でのやりとりでは、どうして最終的に画面を塗りつぶすのか誰にも分からない。ただ、

彼は「色」を見ているということはわかる。まず何色を塗るのか、その上からどの色を塗るのかを決めるために、クレヨンを持っては紙上にあて、違うと思ったらその色は使わずにまた違うクレヨンを選んだりする。また彼は描いている最中、周囲の人をチラッ、チラッと見るしぐさをよくするが、それは隣の人がペンのフタがあかなくて困っているとき助けるような、周りの人達を放っておけない彼の性格ゆえのものだと感じた。

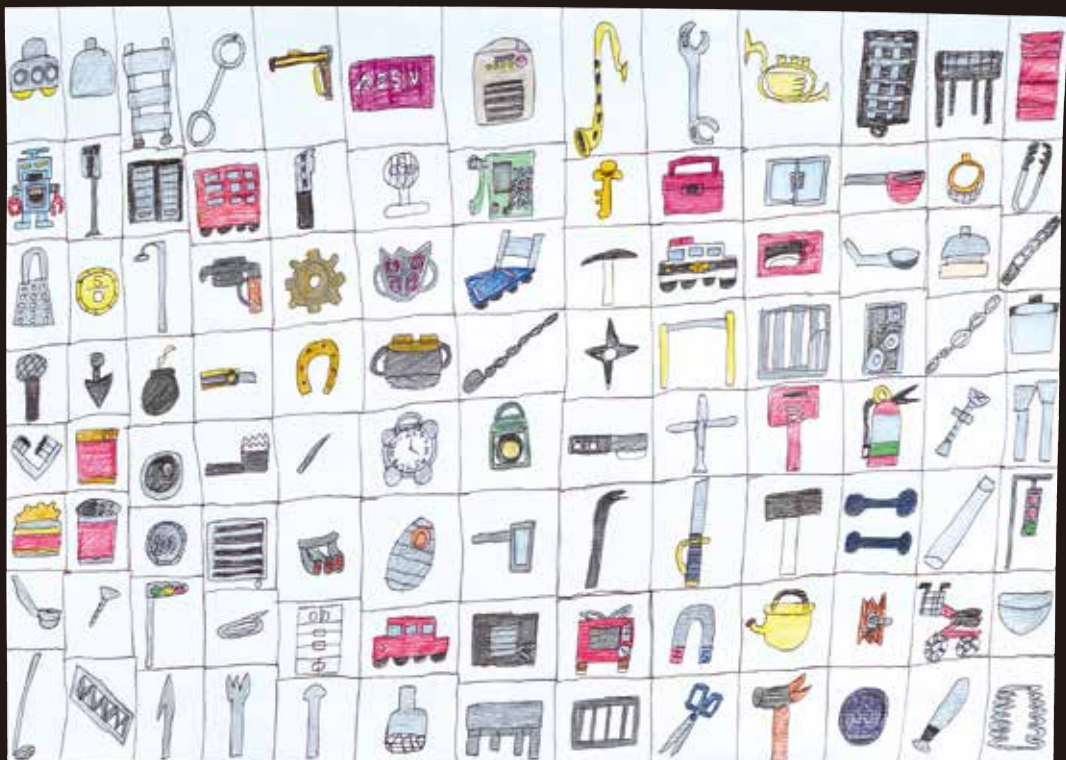
彼の描く単純な形や線は、複雑に絡み合うことはあまりない。絵を仕上げるというよりも、境界となる「線」と、それを無くすことのできる「色」の重なりを遊んでいるように見える。仕上がりなんて気にしない。なんならきっと、いつ終わってもいい。そんな彼の制作姿勢から、シンプルとも複雑とも言える色の美しさ、自然物のような面白い形が残るのだ。

ふと見ていない間に、それまで描いていた線が見えなくなっていく。様々な色で上から塗り込められていくのだ。赤で塗った上に青、その上に灰色、そしてピンクというようにクレヨンは混ざって不思議な色になっていく。その過程で最終的に画面すべての線がなくなることもある。

仕上がりなんて気にしない。なんならきっと、いつ終わってもいい。そんな彼の制作姿勢から、シンプルとも複雑とも言える色の美しさ、自然物のような面白い形が残るのだ。（井上多枝子）



P34上:小川秋夫「無題」2013年 画用紙、クレパス、油性ペン 380×540(mm) P34下:小川秋夫「無題」2014年 画用紙、クレパス 380×540(mm)



川越壮真 KAWAGOE Soma 1994年生まれ



彼の作品には、パターン化された単調さの中に、豊富なイメージとそれがデザインされた美しさを感じる。

鑑賞する人が想像力を掻き立てられるほどの魅力が、この作品には宿っている。

そして色が付いている作品は、鮮やかでどれもがかわいらしいから、小さい子供が特に引き込まれるであろう。見ていて気持ちがほころぶ。

コレクションしたくなるような愛らしさがあり、彼が通う作業所では、すでに商品化しているものも数多くある。

A4からA3ほどのコピー用紙や広告の裏紙に、3cm角ほどのマス目の中に絵を一つ一つ描いていく。マス目を描いてから中の絵を描いていくという手順だ。

作業所の時間内では、この作品を制作していない。休み時間を利用し、自宅に帰ってから制作している状況からすれば、自分の描きたい絵と作業所で描く絵とは、はっきりと区別をつけている。

その作品の内容であるが、愛らしい細かな絵が多い。ラインが丸みを帯びていて、アニメチックな印象も残る。

マス目の中には、日用品だったり、電気製品や工具やヘッドホンやサッカーボール、ヘルメットなど、どこにでもありそうな物が描かれている。

きっと見る人は、なぜそれが一枚の紙の中に隣り合わせで描かれているのか考えることだろう。一つ一つを、顔を近づけて目で追いたくなる。

絵の持つ共通点なのか、物の持つ意味なのか、一体、共通のこととは何なのか。

もしかしたら、子供の方が、素直にこの絵をみて直感で答えられるかもしれない。

絵の中の共通点を聞いてみると、なるほどと、納得することが多い。

たとえば、丸いもののシリーズだったり、四角いもののシリーズだったり、形や素材などで仕分けをしている。

それは自分とは違う、他人が見る物の見え方や感じ方を改めて気付かせてもらえるものだ。

きっと頭の中で分類されていることをそのまま絵にしているのではないだろうか。

何が共通しているのか、当ててみる見方も、きっと面白い。（大西暢夫）



木村圭吾 KIMURA Keigo 1997年生まれ



彼の描く電車を幼少期から見ると、そこにはひとつの共通性があることに誰もが気付くだろう。母親から話を聞くと、彼は幼い頃から電車が好きでよく描いていたというが、それは高校生になった今でも続いている。

彼は、電車を車両ごとに認識しているようだ。ノートやスケッチブックには、一枚の紙に一車両描き、次のページにはそれに繋がる一車両を描いている。年を重ねるにつれ描く電車の細かなところを再現できるようになっているが、まだ文字を覚える前の幼少期のときの絵でも、はっきりとは読めないが行き先表示だと思われる漢字のような文字や数字が描かれている。電車を描き始めた7歳頃は、車両の四角い形や線を描いてはその線が気に入らず、次のページにまた線を描き、そしてまた次のページというように、最後まで電車の絵を仕上げられなかったことが続いていたらしい。

クリップで幾つもの電車の切り抜きがぶら下がっているものは、彼が12歳頃から数年間、自宅で作っていたものだ。これも一車両ごとに描かれてあり、それらは切り、セロハンテープで繋がれている。自宅での保管方法を母親が考え、クリップで挟んで吊るということになったらしい。

自閉症の人で電車好きの人は多い。車やバスなど乗り物は他にもいろいろあるのに、なぜ電車なのだろう。一般的に電車の秩序正しさ、規則正しさ、そして予測しやすさからではないかと言われている。電車は線路に沿って、どこへ何時に行くかが決まっており、そしてその通りに動いていく。線路や枕木の規則正しい並びも、彼らを惹きつける魅力の一つではないかと言われている。しかし、電車好きと一言で言っても、その表現方法はそれぞれまるで違う。彼の場合は先述したとおり一車両ごとの認識の上の表現であり、そしてそれは、電車の構造を認識した上での描き方であると言える。

彼は自作のことを詳しく言葉で説明することはできないが、母親から様々なことを聞くことができた。彼は今、自分ひとりで外出ができる。蒸気機関車の博物館へ行ったり、学校へも電車で通っている。それは母親が、チケットの買い方やお金の支払い方などを丁寧に彼に教えてきたからだという。日常生活の中で彼が疑問に思

うひとつひとつに丁寧に向き合ってきた家族の愛が、絵を描くこと、泳いだり走ったりすること、音楽を聴くことなど、自分で何をするかを選択することができる彼自身の柔軟さを獲得させているのではないかと思われた。

彼に「絵を描く?」と聞くと、「描く」といつも答えるそうだ。行った場所や好きなもの、今日自分がしたことなどを描き続ける彼は、自分の生きてきた日々を記録し、それを使って紙上で遊んでいるのかもしれない。絵から彼の、世の中の認識の仕方が見えてくる。(井上多枝子)



P38上:木村圭吾「電車」2010年 スケッチブック、鉛筆、色鉛筆 180×255(mm)
P38下:木村圭吾「電車」2010~2012年 コピー用紙、鉛筆、色鉛筆 (110~160)×(900~2000)(mm)



土屋雅顕 TSUCHIYA Masaaki 1949年生まれ



彼は信楽青年寮という、日本でも有数の歴史
在る障害者施設で暮らしながら、粘土造形をし
ている。彼の造形は今年で約20年間に及ぶ。
作品は一見すると、何を作っているのか?は分
からない。実は、これは「家」なのだ。

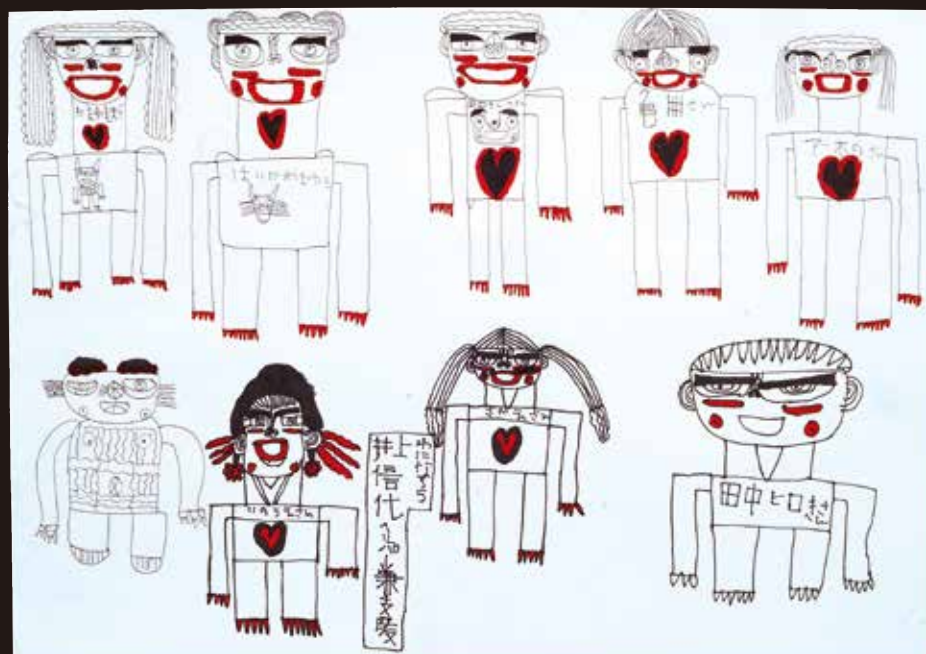
粘土をトントンと板に押し当てて、約3~4セン
チの厚みの板状の粘土板を作り、それを組み
立てて、様々な家を作り続けている。一度素焼
きをしてから、釉薬という焼き物用の絵の具でカ
ラフルな色づけをしてゆく。出来上がった作品
の重さは2、3kgは在るだろうか。この重量感と、
ポップで軽妙な味とが、不思議なマッチングを
成している。

彼はこの「家」の作品の合間に、マグカップなど
の実用品も作るのだが、そのコップは片手では持
てないほどの重さだ。実用的な陶芸を作ることもあ
る信楽青年寮施設では、実用品とアート作品の間
に垣根は無いのが面白いところだ。重くて使い難
いお皿や茶碗なども、発想を変えれば不思議で
魅力的な「アート食器」として捉えられている。

1965年から今日まで、施設で暮らししてい
るが、若い頃には信楽の街の製陶場で実用的な
食器の制作を見ていたことも影響しているのか
もしれない。彼の中で、作品は「食器」から「ア
ート」へと、彼の自然の感性が移行していったのだ
ろう。（はたよしこ）



西尾政二 Nishio Seiji 1975年生まれ



以前、彼の作品を数枚観た時、「西尾政二さんは、きつとかなりの作品量が在るだろう。」と、私は直感した。

彼の施設現場を訪問すると、そこには想像どおりに大量の絵が在った。彼の絵のモチーフは大半が人間と、動物だ。人物は、施設のスタッフ、友達、アニメーションの登場人物などが多くを占めている。作品を見せてもらっていると「これは〇〇さんです。これは〇〇という動物です。」と間髪入れず語ってくれる。描いた絵を披露するのが楽しくて仕方ないという感じで、絵の説明が延々と続くのだ。

彼独特のスタイルで人物の表現をしているが、描けば描くほどに「自分のスタイル」が形成されている。それは一般の画家やイラストレーターの表現と同じように、「自分の世界」に深く深く潜って行くような、ある種の陶酔感なのだろう。その結果、作品には一層の強さが増して来ているようだ。

彼はダウン症の障害があるが、絵をきっかけに様々なお喋りをして施設スタッフ達と楽しい時間を過ごすようになった。登場人物の特徴も捉えており、彼に絵の中の人物についてを語らせると、思わず笑ってしまうような実際のエピソードなど、聴いていると実に楽しい。（はたよしこ）



P42上:西尾政二「無題」2011~2012年 画用紙、油性ペン 540×380(mm)

P42下:西尾政二「わにならうのスタッフのみなさん」2014年 画用紙、油性ペン 380×540(mm)



西村一幸 NISHIMURA Kazuyuki 1939年生まれ



彼は現在75歳である。もともと絵を描くことは好きだったようだが、本人に聞いてもはっきりしたことは分からない。彼には57歳以前の記憶がないのだ。

その年、彼は階段から落ちて意識不明の重体となった。その後意識は戻ったが記憶は失われ、脳に障害が残ったという。半年後に退院したが元の生活を送ることはできず、仕事は障害者通所施設へ行くこととなった。

そこで彼は絵を描き始めた。作業室の窓から見える外の風景を、鉛筆や色鉛筆を使って丁寧に時間をかけて描いていた。写真やプリントされたものを見て描くことはなく、なぜかいつも外を見つめて描いていたという。

そんなある日、描いていた窓の外の風景が画用紙の左側に収まり、右側が余ってしまったことがあった。作業所の職員が、「何か花でも描いてみたら?」と何気なく言うと、彼は不思議な植物を描いたのである。「西村さんに聞いたら、これは「ピラカンサや」と言うんです」

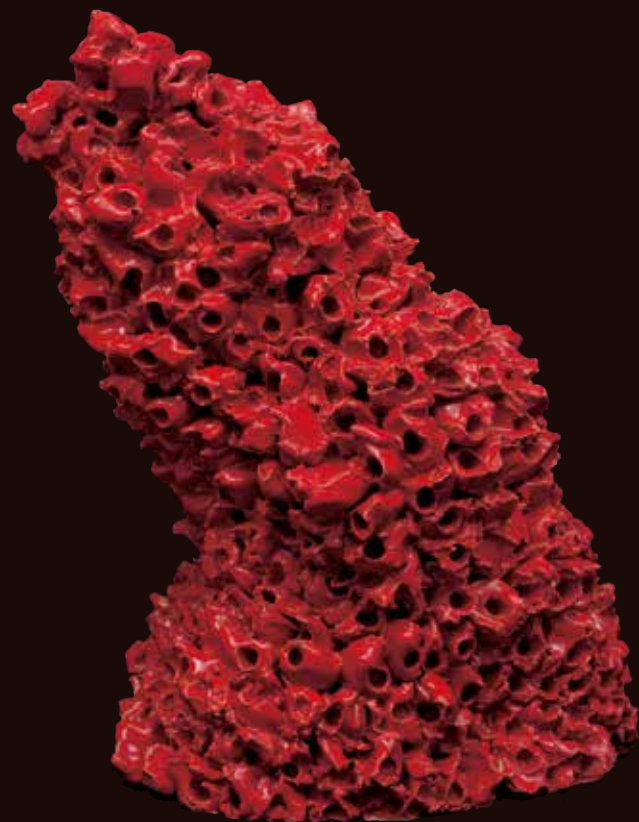
彼が外の風景ではなく以前の記憶を思い出して絵を描いたのは、これが初めてだという。

その後、周囲の人たちがその絵を面白がっ

たこともあり、彼は「ピラカンサ」を描き続けた。鉛筆で下書きをし、色鉛筆で色づけしていく。黄色や緑色でグラデーションになるように色に変化をつけていく。

ピラカンサは実在する植物で、日本では多く栽培されており、庭木としても人気だ。赤い小さな実がたわわに実り、枝が垂れているさまは誰でも見たことがあるだろう。彼の描くピラカンサとは姿かたちが違うように見えるが、葉の形や赤の点点など断片的にイメージは重なる。職員がピラカンサの写真を本人に見せたことがあるらしい。彼は「これ、これ!」と記憶と確認するように応えていたが、それでも彼の描くピラカンサの形はそれまでのものと変わらなかった。無くした記憶と、思い出していく記憶。その狭間で、彼にしか描き得ない独創的な植物が誕生したのだ。

2009年、彼の描いた「ピラカンサ」が大きなお寺で展示された。小さなものから大きなものまで、広いお堂の床に並べられた作品たちは、ゆったりと地に生えているようだった。このピラカンサがきっかけとなり、今では様々なモチーフで絵を描いている。（井上多枝子）



本城 直 HONJYO Sunao 1985年生まれ



彼の粘土造形は、「何か具体的なイメージを形にしよう」という意図は無いようだ。粘土をちぎって、くっつける。そこに棒で穴をあける。その連続行為を延々と繰り返していく。ただそれだけの行為から誕生しているのだ。しかし、結果的にその形は、見る者に様々なイメージの想像をかり立たせる。増殖を続ける生物細胞の塊に

も見えるし、昆虫の巣の様にも見える。また、深海に生息するサンゴ(珊瑚)の様にも見える。

彼は自閉症の障害があり、会話は全くできない。共に制作する他者の作品にも強い関心をみせる。それは、粘土造形が「作業」という仕事ではなく、「自分の表現」として、彼自身の中に在るのだろう。(はたよしこ)



P46上:本城直「無題」2012年 陶土、釉薬 405×315×350(mm) P46下:本城直「無題」2012年 陶土、釉薬 390×340×300(mm)
P47上:本城直「無題」2013年 陶土、自然釉 200×500×400(mm)

2014年度 障害者の芸術活動支援モデル事業 報告書

2015年3月31日発行

[制作・発行]

社会福祉法人グロー（GLOW）～生きることが光になる～

法人本部企画事業部

〒521-1311 滋賀県近江八幡市安土町下豊浦4837-2

TEL 0748-46-8118 FAX 0748-46-8228

Mail artbrut_info@glow.or.jp

障害者の芸術活動支援モデル事業連携サイト

URL <http://renkei-sgsm.net/>

[発行責任者]

北岡賢剛（社会福祉法人グロー（GLOW）理事長）

[構成]

田端一恵（社会福祉法人グロー（GLOW）法人本部企画事業部次長）

[デザイン]

森口耕次（AUN CREATIVE FIRM）

[写真]

大西暢夫、社会福祉法人グロー（GLOW）

[印刷・製本]

株式会社スマイ印刷工業

[助成]

障害者の芸術活動支援モデル事業（厚生労働省補助事業）

